

泉ある家

宮沢賢治

青空文庫

これが今日のおしまいだろう、と云いながら齊田は青じろい薄明の流れはじめた県道に立つて崖に露出した石英斑岩から一かけの標本をとって新聞紙に包んだ。
富沢は地図のその点に橙を塗って番号を書きながら読んだ。齊田はそれを包みの上に書きつけて背囊に入れた。

二人は早く重い岩石の袋をおろしたさにあととはだまって県道を北へ下った。

道の左には地図にある通りの細い沖積地が青金の鉞山を通って来る川に沿って青くけむった稲を載せて北へ続いていた。山の上では薄明穹の頂が水色に光った。俄かに齊田が立ちどまった。道の左側が細い谷になっていてその下で誰かが屈んで何かしていた。見るとそこはきれいな泉になっていて粘板岩の裂け目から水があくまで溢れていた。

(一寸おたずねいたしますが、この辺に宿屋があるそうですがどつちでしようか。)

浴衣を着た髪の毛の白い老人であった。その着こなしも風采も恩給でもとっている古い役人という風だった。露を泉に浸していたのだ。

(宿屋ここらにありません。)

(青金の鉾山できいて来たのですが、何でも鉾山の人たちなども泊めるそうで。)

老人はだまってしげしげと二人の疲れたなりを見た。二人とも巨きな背嚢をしよつて地図を首からかけて鉄槌を持つている。そしてまだまるでの子供だ。

(どつちからお出でになりました。)

(郡から土性調査をたのまれて盛岡から来たのですが。)

(田畑の地味のお調べですか。)

(まあそんなことで。)

老人は眉を寄せてしばらく群青いろに染まった夕ぞらを見た。それからじつに不思議な表情をして笑った。

(青金で誰か申し上げたのはうちのことですが、何分汚ないし、いろいろ失礼ばかりあるので。)(いいえ、何もいらないので。)

(それではそのみちをおいでください。)

老人はわずかに腰をまげて道と並行にそのまま谷をさがった。五、六歩行くとそこにすぐ小さな柵屋があった。みちから一間ばかり低くなつて蘆をこつちがわに堀のように編んで立てていたののでいままで気がつかなかったのだ。老人は蘆の中につくられた四角な

くぐりを通つて家の横よこに出た。二人はみちから家の前におりた。

(とき、とき、お湯持ゆもつて来こ。)老人は叫さけんだ。家のなかはしんとして誰も返事だれをしなかつた。けれども富沢とみざわはその夕暗ゆうやみと沈黙ちんもくの奥おくで誰かがじつと息いきをこらして聴きき耳みみをたてているのを感じかんじた。

(いまお湯をもつて来ますから。)老人はじぶんどりに行く風かぜだった。(いいえ。さつきいずみの泉あらいで洗あらいますから、下駄げたをお借かりして。)老人は新らしい山桐やまぎりの下駄もととも一つ縄なわ緒おの栗くりの木下駄もとを氣きの毒どくそうに一つもつて来た。

(どうもこんな下駄で。)(いいえもう結構けっこうで。)

二人はわらじを解といてそれからほこりでいっぱいになった巻脚絆まきぎやはんをたたいて巻まき俄にわかに痛いたむ膝ひざをまげるようにして下駄げたをもつて泉いづみに行った。泉はまるで一つの灌漑かんがいの水路すいろのように勢いきおいよく岩の間から噴ふき出でていた。斉田さいたはつくづくかがんでその暗くらくなった裂さけ目めを見て云いつた。(断層泉だんそうせんだな。)(そうか。)

富沢は露つゆをつけてある下のところに足を入れてシャツをぬいで汗あせをふきながら云いつた。

頭あたまを洗あらつたり口くちをそそいだりして二人はさっきのくぐりを通つて宿やどへ歸かえつて来た。その煤すすけた天照大神あまてらすおおかみと書いた掛物かけものの床とこの間まの前まへには小さなランプがついて二枚まいの木綿もめん

の座布団がさびしく敷いてあつた。向うはすぐ台所の板の間で炬が切つてあつて青い煙があがりその間にはわずかに低い二枚折の屏風が立つていた。

二人はそこにあつたもみくしやの単衣を汗のついたシャツの上に着て今日の仕事の整理をはじめた。富沢は色鉛筆で地図を彩り直したり、手帳へ書き込んだりした。斉田は岩石の標本番号をあらためて包み直したりレットルを張つたりした。そしてすっかり夜になつた。

さつきから台所でことごとやつていた二十ばかりの眼の大きな女がきまり悪そうに夕食を運んで来た。その剥げた薄い膳には干した川魚を煮た椀と幾片かの酸えた塩漬の胡瓜を載せていた。二人はかわるがわる黙つて茶椀を替えた。

(この家はおじいさんと今の女のひと二人切りなようだな。) 膳が下げられて疲れ切つたようにねそべりながら斉田が低く云つた。

(うん。あの女の人は孫娘らしい。亭主はきつと礦山へでも出ているのだろう。)
ひるの青金の黄銅鉱や方解石に石榴石のまじつた粗鉱の堆を考えながら富沢は云つた。女はまた入つて来た。そして黙つて押入れをあけて二枚のうすべりといの角枕をならべて置いてまた台所の方へ行つた。

二人はすっかり眠る積りでもなしにそこへ長くなつた。そしてそのままうとうとした。

ダーダーダーダーダースコダーダー

強い老人らしい声が剣舞の囃しを叫ぶのにびっくりして富沢は目をさました。台所の方で誰か三、四人の声かがやがやしているそのなかでいまの声が出たのだ。

ランプがいつか心をすっかり細められて障子には月の光が斜めに青じろく射している。盆の十六日の次の夜なので剣舞の太鼓でも叩いたじいさんらなのかそれともさっきのこのうちの主人なのかどつちともわからなかつた。

(踊りはねるも三十がしまいつて、さ。あんまりじさまの浮かれだのも見だぐないもんさ。)
 (むつとしたような慄悍な三十台の男の声が出た。そしてしばらくしんとした。)

(雀百まで踊り忘れずでさ。)
 (さっきの女らしい細い声を取りなした。)

(女こ引ぱりも百までさ。)
 (またその慄悍な声刺すように云つた。そしてまたしんとした。そして心配そうな息をこくりとのむ音が近くにした。富沢は蚊帳の外にこの主人が寝ながらじつと台所の方へ耳をすましているのを半分夢のように見た。)

(さあ帰って寝るかな。もつ切り二つたな。そいであこいづと。)
 (戻るか。)
 (さっきの女の声が出た。こつちではきせるをたんたん続けて叩いていた。)
 (亦来るべいさ。)

何だか哀れに云つて外へ出たらしい音がした。

あとはもう聞えないくらいに低い物言いで隣りの主人からは安心に似たようなしずかな波動がだんだんはつきりなつた月あかりのなかを流れて来た。そして富沢はまたとろとろした。次々うつつるひるのたくさんの青い山々の姿や、きらきら光るもやの奥を誰かが高く歌を歌いながら通つたと思つたら富沢はまた弱く呼びさまされた。おもての扉を誰か酔つたものが歌いながら烈しく叩いていて主人が「返事するな、返事するな。」と低く娘に云つていた。さつきの男も帰つて娘もどこかに寝ているらしかった。「寝たのか、まだ明るぞ。起きろ。」

外ではまたはげしくどなつた。

（ああこんな眠らなくては明日の仕事がひどい。）富沢は思いながら床の間の方にいた齊田を見た。

齊田もはつきり目をあいていて低く鋏夫だなど云つた。富沢は手をふつて黙っている。云つた。こんなときものを云うのは老人にどうしても気の毒でたまらなかつた。

外ではいよいよ暴れ出した。とうとう娘が屏風の向うで起きた。そして（酔つたぐれ、大きらいだ。）とどうやらこつちを見ながらわびるように誘うようになまめかしく眩いた。

そして足音もなく土間^{どま}へおりて戸をあけた。外ではすぐしずまった。女はいろいろ細い声
 で訴^{うった}えるようにしていた。男は酔^よつていないような声でみじかく何か訊^ききかえしたりして
 いた。それから二人はしばらく押問答^{おしもんどう}をしていたが間もなく一人ともつかず二人ともつ
 かず家のなかにはいつて来てわずかに着物^{きもの}のうごく音などした。そしていっぱい^きに気兼^{きが}ね
 や恥^{はじ}で緊^{きん}張^{ちよう}した老^{ろう}人^{じん}が悲^{かな}しくこくりと息^{いき}を呑^のむ音がまたした。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年5月

入力：ゆうき

校正：noriko saito

2009年8月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

泉ある家

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>